

追浜あんず通信

第9号 2015年3月

発行：特定非営利活動法人アクションおっぱま

おっぱまはっけん倶楽部から

当倶楽部は5年前追浜の歴史を学習し、一方で地域イベントに協力参加する形で会員8名でスタートした趣味の会です。この一年は会員も20名になり積極的に追浜の魅力を紹介しようと秋には約30名の参加者を迎えて「史跡巡りツアー」を行い、今や追浜の名所になった第三海堡遺構、貝山公園の予科練発祥の碑などの史跡を巡り、昔から伝統のある深浦港に立ち寄りその日取れた魚で昼食を楽しむイベントを行い、また、年末になって追浜の「歴史一入門編」なる講座を4日間にわたり公開し、始めの3日間で発表した内容に沿って最後の1日

は実際にツアーで歩くというイベントを行い約20名の熱心な参加者がありました。いわばこの1年は倶楽部が今までの地域イベントへの協力型から積極的に企画実行する主催型に大きく変わった記念すべき年になりました。また、NPO アクションおっぱまに協力する形で既に3年前から第三海堡遺構のガイドを毎月行い最近は見学者も激増してきてやりがいを感じているところでもあり、今年は更に新しい発見を目指して楽しみながら活動したいと思っています。

(おっぱまはっけん倶楽部 村澤醇治)

大学生空き家プロジェクト

大学の授業で日本の空き家問題を把握し、横須賀市でも同様の空き家が問題視されていることがわかり、空き家を学生のシェアハウスとして活用する、「追浜空き家プロジェクト」が発足した。活動を開始するにあたり、まずは、「追浜について知る」、「追浜の人たちと交流を深める」ということを第一に活動を始めた。「追浜ナイトバザール」や、「追浜2丁目平和会餅つき大会」、「よこすか産業祭り」等様々な地域イベントへの参加をすることで、地域に根ざした

活動を深めることができた。現在では、対象とする空き家が確定し、居住者も確保する事ができた。横須賀市や地元工務店との連携により、1月下旬には改修工事着工予定である。4月入居を目標とし、多くの学生と共に自分達の手で作り上げていく。また、プロジェクトのメンバーや入居者を中心に、地域の方々との交流の機会を設けるイベントも構想中である。今後は、こういった空き家活用を追浜じゅうに広げていきたい。(関東学院大学四年生 佐藤勇希)



「追浜まるごとミュージアム・貝山の未来編」の提案



貝山周辺の公有水面は、明治43年から夏島の一部、烏帽子島、貝山から延びた丘陵地が削られ旧海軍施設や飛行場用地に埋め立となりました。存知ですか。

明治45年海軍航空術研究委員会が田の浦の水雷団に出来ました。

埋立てで残った貝山は、気象観測所、斜面に燃料庫等の重要な場所でした。

昭和19年末から、米B29戦略爆撃機の空襲で東京を始め被害を受けました。

貝山も旧海軍航空隊の司令部、通信施設、事務所等に地下壕が掘られ本土決戦に備えました。

この貝山活性の提案です。

(環境面の改善)

動物愛護センター側から浄化センター側の入口周辺に通りぬける道がないので、「パイプ式梯子スロープ」を造り深浦側からも登れるようにしたいです。

また、展望塔までの坂道に「手すりやバギー安全コーナー」を設置し「高齢者や子育て世代の散策コース」を完成させたいです。

第2期の杏の植栽を公募で増やし更にお花畑も作り「杏の里」へ近づけたいです。



(歴史遺産の面)

見学が止められている貝山地下壕の、ありのままを伝え、保存活用で平和教育の場に見学会の再開を望んでいます。危険対策に照明や入口付近に待避所ボックスを置き安全を確保する必要があります。

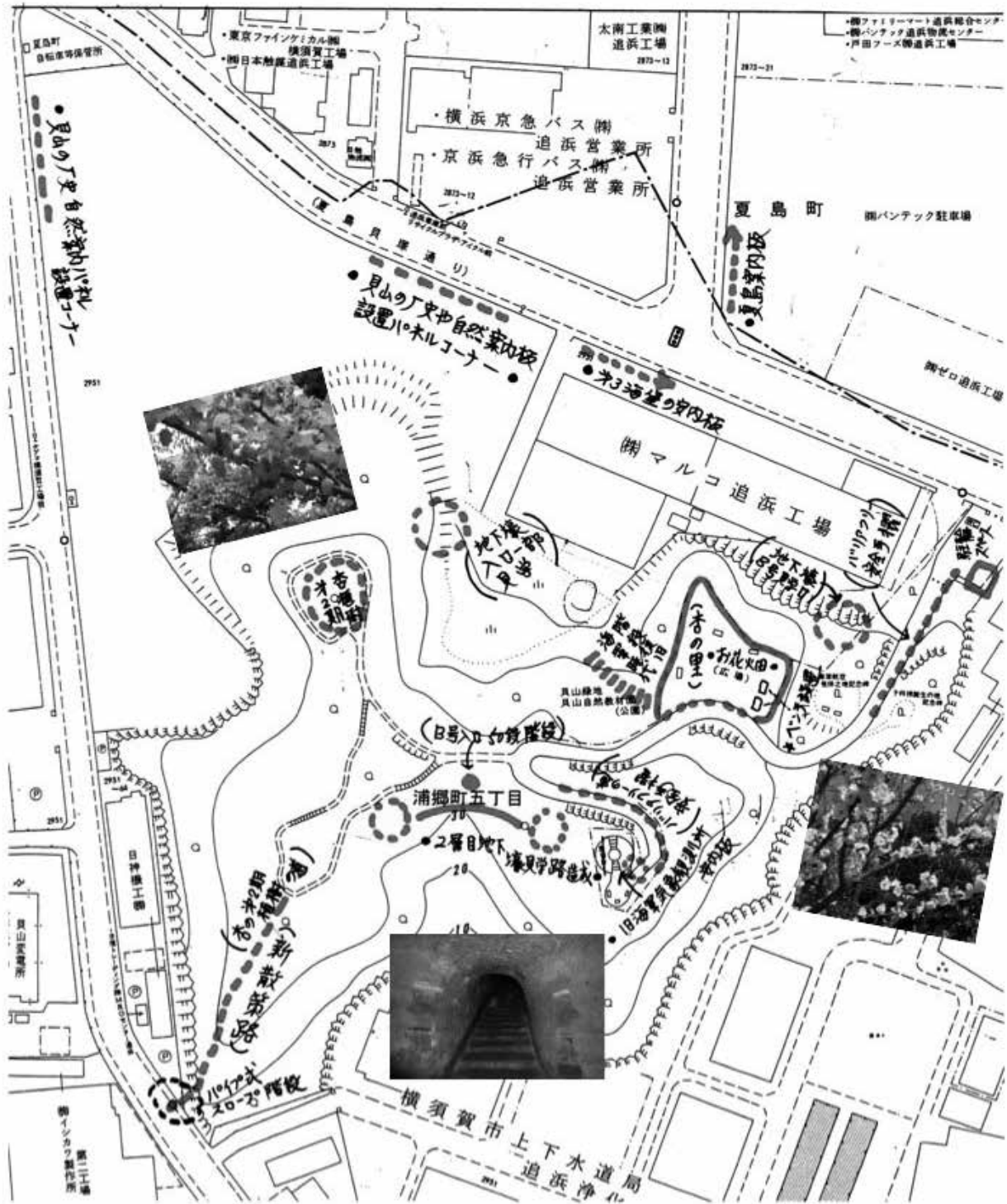
通称B壕は司令部、水場、トイレ、かまど、レンガの道等の居住区を小規模に復元し、司令部の部屋を戦跡遺物の展示館とします。

景観、歴史遺構等の案内や保護のため、語り部・貝山レインジャーを編制したい。



市民に馴染みの薄い貝山の歴史遺産が、荒廃する前に活用計画を考えてみましょう。

▼▼追浜まるごとミュージアム（仮称）・貝山編▼▼



(NPO 法人アクションおっぱま 副理事 青木 猛)

ら・ぶ・いん おっぱま

福島仁さんインタビュー

終戦の年、昭和 20 年追浜南町の防空壕の中で生まれ、そのあと追浜本町に引っ越した。道路で遊んでいた。自転車に乗ったり裏山にいて遊んだりしていた。鷹取山で陣地もつくったりもした。

昭和 9 年に家は呉服屋さんを始めた。病弱だったので親が心配して関東学院六浦小学校に入れた。大きくなったらロケットに乗りたかった。宇宙にあこがれた。大学は関東学院の経済で経営の勉強をし、卒業して呉服屋を継いだ。趣味は登山。鷹取山で岩のぼりの練習をする。始終、山には行きたいと思っている。

昔の面影がある鷹取山の草むしりを近隣の人達とやっているが考え方の基本はキリスト教である。何とか世の中の役に立ちたいと思う。

追浜は長く住まないと駄目である。追浜のまちへの夢はお金のかからないもので人の心をつかむものを目指したい。まちのために動いていることに関しては評価してほしい気持ちはある。追浜ワインを誰が作ったのか、忘れないでほしい。醸造免許を協同組合でとり、半年待った。ワインについてはサポーターを作ったところ人気だった。

追浜の町の中心は海軍だった。まずは貝山緑地を考えたい。平和のことも含めてフィールドミュージアム構想を実現していきたい。そんな夢を追浜には持っている。

(NPO 法人アクションおっぱま理事 吉田洋子)



谷川岳・黒戸尾根

追浜あんず通信 2015 年 3 月発行 9 号

発行 特定非営利活動法人アクションおっぱま

発行人 昌子住江

編集 NPO 法人アクションおっぱま

編集委員会

羽田から飛んで来た玄米ご飯缶詰

—防災機器展見学記—

2015 年 3 月 14 日、第 3 回国連防災世界会議が仙台で開催され、3 月 18 日に閉会した。この会議に付随して、防災機器や防災関連の新製品が多数出品され、広い会場は自社自慢の製品がいかにかに災害に役立つか、の説明や P R で活気を呈した。私は 3 月 15 日、一日のみの見学であったが東北大震災が、これまでの防災に対する考え方を如何に大きく変えたかを実感出来る展示コーナーに出会った。それは災害時には余り取り上げられなかった災害食コーナーの各種食材の展示である。その中で、私が最も注目したのは玄米ご飯缶詰である。その説明資料には、横浜防災フェア 2014・災害食グランプリに於いてグランプリ受賞とある。私は 1 缶試食したところ玄米ご飯に有りがちな硬さが無く、普通の白米のように食べられる。説明資料にも、＜美味しくて栄養豊富な日常食＞「白米に比べて、ビタミンが 5.0 倍、ミネラルが 4.8 倍、食物繊維が 8.8 倍。特に女性の皆様からは絶大なご支持を戴き、毎日召し上がる習慣の方が増えています。」とある。つまりこの玄米ご飯缶詰は日常食として、買い置いたものが、いざという災害時に白米よりも優れた栄養源になれる。これは玄米に玄米菌が存在し、腸内の善玉乳酸菌の増殖に関与しているからである。私は玄米ご飯缶詰に日常食、災害食、菌食の三つの食の役割を見た思いがするのである。まさに缶詰のラベルにあった「羽田の逸品」と私は思った。

(NPO アクショおっぱま監事 内野忠治)

編集後記

- ◆アクション・おっぱまは今まさに羽ばたこうとしています。見てください。追浜はっけん倶楽部の活動を！空き家プロジェクトの進展を！追浜まるごとミュージアム・貝山の未来への提案を！皆様の力強い行動を「あんず通信」は伝えていきます。(内野)
- ◆追浜空き家プロジェクトが動き始めました。二軒目、三軒目の候補もあるようです。今後の展開が期待されます。(昌子)
- ◆またまた発行までに時間がかかってしまいました。早くから原稿下さった方には申し訳ありませんでした。でもずいぶん多彩な内容になったと思います。ご協力ありがとうございました。(吉田)
- ◆今年度も情報誌を楽しんで頂けましたでしょうか。今後も“ためになる”情報誌をお届けできるように、編集者一同張り切っております。(河村)